

夢幻の山旅もまた楽し ～ワタシの机上登山～

おおつか

かつての我が国の高度成長経済に何千万分の一くらいの貢献はしたかもしれないが、我々の世代は企業戦士に駆り出されていたので若い頃は山に行くなどと言う余裕は全く無く、また、“毎日が日曜日”になってからは、特に馬齢を重ねるに及んで今度は暇は山ほどあるが山に行ける体力は既に無しという情けない世代である。

従って、曲りなりにも山に行けた年代は、学生の頃の数年間と、会社でもそろそろ窓際に追いやられるようになってきた 50 歳頃から定年までの数年間、及び未だ元気が残っていた“毎日が日曜日”の数年間の、大目に見積もってもせいぜい合計で 20 年間程度ということになる。マ、生涯で勘定するとせいぜい 1/4 がいいところか。今の若い方々が一生を通じて山を楽しめるのが羨ましい限り。

さて、そのような次第で、せっせと我が国の経済発展に尽くしていた間でも山への想いは一応は心の片隅に残っていたのであるが、さすれば、その間の山への無聊は何をしてゴマカしていたのであろうか。

私は地図を見るのが好きで、国土地理院の 20 万図幅を自宅の部屋の壁一面に 20 枚ほど繋いで貼ると南アルプス、中央アルプス、北アルプスから東北南部の山々までが一望できる。また、別の壁にはランドサット衛星から写した関東一円の衛星画像も貼り付けて、部屋の真ん中に座ってこれらの図幅をジッと眺めていると、かつて登った山々や未だ登ったこともない山々のあれこれが彷彿としてくるのであった。

また、私ほどのベテラン(!?)になると、地理院発行の 2 万 5 千図幅を目を半眼にして眺めるだけで、山容、地形は言うに及ばず、生えている植生、棲んでいる生き物の様子から、新緑の木漏れ日、錦秋の紅葉、飛び交う岩ツバメの羽音、はてはゴゴと吹きすさぶ風雪の音までが聴こえてくるから不思議なものである。

歳をとってくると、山に行くのが億劫になり、蒲団に潜ってあれこれの夢に耽ったり、部屋に広げた地図の上を蠅になって飛び回ったりして、夢幻の世界に沈殿することも多くなる。

山行を計画する時に地図上で計画ルートをあれこれとトレースするのは毎度のことであるが、これとは別に地図上だけで山に登る（登った気になる？）楽しみがあることは、皆さんにも経験がお有りであろう。これを“机上登山”というが、この用語は食生態学なる怪しげな学問の発明者であり、エッセイスト、探検家、登山家でもあったかのユーモラスな人魂の絵で知られた西丸震哉センセイの同名の著書が嚆矢であるらしい。センセイのこの著書『机上登山』*は、北は北方四島の択捉島から、南はマングローブの西表島まで、殆ど人が行かない 20 箇所“別天地”を地理院 2 万 5 千図幅に記載された地図記号だけを頼りに、著者独特の地図と博物学に対する蘊蓄を傾けつつ、桃源郷と思われる場所を探し出して机上逍遥した架空紀行である

ワタシにも机上登山と大法螺吹き^あの趣味があって、2.5 万図の地図記号だけを頼りに“人跡未踏”と思しき場所を繋いで歩き、それを如何にも見て来たような嘘の山行記にデッチ上げるというのも、これもまた楽しいものである。そのようにして、日本の山では数十の、海外の山でも幾つかの机上の“初登ルート”をヒネリ出してきた。シリウス・ジャーナルやシリウスHPにもその一つがお口汚しで掲載されているので、ご覧頂ければワタシ奴の大法螺の馬鹿さ加減とその奥浅さがお分かり頂けよう。

さて、まずはその大法螺登山にどこの山城や場所を選び出すのが最初のポイントとなる。近年は人跡未踏などという地域は全く無くなったので、かつての“日本の秘境”のような場所を期待することはできない。しかし、山城が大きく懐が深い山には、眼を細めて半眼に開いて上空を飛ぶ鳥になって鳥瞰すれば、地図の破線（登山道）を大きく外れた辺りに案外面白そうな地形が必ず見つかるものである。

（等高線や崖マークがゴチャゴチャと異常に混んでいる中に、そこだけが取り残されたような小さな空

白地帯が見つければ、そこが山中の桃源郷であることが多い)。

その地形が周りの絶巔から恰もそこだけが取り残されたようなびやかな草原の池塘であっても、また、峻険な稜線上の猫の額ほどの肩であっても、はたまたゲジゲジ・マークが連続する沢のドンツマリから湧き出ていそうな猿の湯浴み温泉であっても、そこまで行くルートや、そこから先のルートは勿論、登山道などというシロモノは無いので、地形図の地図記号だけを頼りに想像で歩くだけだから如何様にも歩けるのである

これがバーチャル登山の良いところで、実際に実地の同じルートを歩いてみると、大抵はハイマツの海を泳がされたり、密林の藪漕ぎでロストポジションに陥ったり、或いは断崖絶壁で万事休すになったり、下の見えない滝壺に滑落死したりで、マ、ことほど左様に簡単にはいかないのである。

別荘の安楽椅子に揺られながら、釣竿や釣り針のあれこれの想像を逞しくして、近くのドブ川で釣り上げた数センチほどの雑魚がいつの間にやら溪流の3尺を超す大岩魚に化けるといふ大法螺吹き釣師のことをアームチェアー・アングラーというそうだが、こちら窓の外に五月雨^{さみだれ}のトレモロでも聞きながらアームチェアー・クライマーを楽しんだ方がよろしいのかも・・・。

そうは言いながら、想像を逞しくして“踏破”したルートのあれこれを、実際に後追いで歩いてみるのも、これまた一興かと・・・。ワタシも、かつて机上で歩いてみて気に入っているルートの一つ、後立山の五龍岳から黒部溪谷側に下った東谷山という池塘の草原でビール片手に幕営し、そこから未だ誰も下ったことが無い(?)とされるゲジゲジ・マーク連続の峻険なゴルジュ帯である餓鬼谷を滝壺に転落しそうになりながら懸垂下降の連続で下って、川底から湧き出ている餓鬼の湯で餓鬼と一緒に湯浴みしてから、黒部下ノ廊下の水平歩道に這い上がるという3泊4日の机上登山でやった山旅を実地にやってみたいと思うが、もうその体力も気力も残されていないのが情けないところ。

マ、たぶん、机上での想像と、己の読図力が如何にエコロ加減なものであったかという実地での乖離に立ち上がれなくなるほどのショックを受けて落ち込むか、或いは餓鬼谷の下降で滝壺に滑落して溺死するのがオチであろうから、やはりロートルは安楽椅子でウトウトしながら想像を逞しくしている方がよろしいのかも・・・。

